

学推だより vol.7

KOKURA
Elementary School
June 18th / THU / 2015
発行：学推担当

これから求められる資質・能力について①。

21世紀のこどもたちに必要な力とは。

アクティブ・ラーニングが目玉となる次期学習指導要領では、私たち教師には「『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という、学びの質や深まりを重視することが必要」という視点が強く求められます。つまり、授業研究会等では、**「どう教えたか」という指導法を語る力よりも、「子ども一人一人の45分間の学びを、個名でどの程度語ることができるか」という子どもの学びの姿を語る力が問われてくる**と私は考えています。

そこで、今回の学推だよりでは、子どもの学びや学ぶ姿を語る際に、どういう力をめざして子どもたちが学んでいく必要があるのかを整理したいと思います。

私たちはグローバル社会の中にいます。これからますますグローバル化が進んでいくこの社会を生き抜くために必要とされる**「21世紀型スキル」**がATC21sプロジェクトから提唱され、世界共通の力になると言われています。詳細については紙面上割愛しますが、PISA調査も2015年調査から「21世紀型スキル」の測定を導入するそうです。

では、この「21世紀型スキル」はどのような力なのでしょう。ATC21sプロジェクトのメンバーでもある三宅なほみ先生（東京大学大学院教授）が次のように説明されています。

環境問題や経済、国際関係などでも意見の違う人たちが集まって知恵を出し、討論して、その時点で考えられるベストの解を出して、どこまでいけるかを確かめつつ、ゴールに近づいたらそのゴールを見直しながら進む、そういう時代になっています。教育も、決まった答えを教員が教えていくのではなく、子どもたちが答えを見つけたり、同時に問題を発見したり、グループ同士でコミュニケーションしながら解法を共有し、知を再構築していくプロセスが大切になっています。

このことから、私たちは日々の授業の中で、**「知らないことを一斉学習ではない形で知る」「お互いの知識を出し合って情報交換し、新しい見識を練り上げる」「新しい疑問や課題にたどりつく」**という過程を子どもたちに体験させることが必要だとおっしゃっています。この繰り返しによって、次のようになるとありました。

一人一人の学習者が他者の多様な考えを統合して自分の考えを深め、自分なりに納得した答えを得ることができる

次号では、その具体的な活動例と「21世紀型スキル」等を受けて国立教育政策研究所がまとめた**「21世紀型能力」**（H26年度「学推だより Vol.13」を参照）について取り上げたいと思います。

【参考資料】 http://www.disc.co.jp/uploads/2012/03/2012.1.10miyakeshi_jinzai.pdf